



ラストファリアンの讃美歌 : ジャマイカ・ラスト ファリ運動のナイヤビンギ音楽(3)

長嶋, 佳子
柴田, 佳子

(Citation)

史境, 5:100-123

(Issue Date)

1982-11

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001730>



ラストファリアンの讃美歌

ー ジャマイカ・ラストファリア運動のナイヤビンギ音楽(3) ー

長嶋 佳子

先号では、ラストファリア讃美歌の表現について、場としてのグラウネイション、表現手段・技法としての楽器・リズム・旋律等を取り上げた。また表現の内容については歌詞を中心に、代表的なグループ(エチオピア正統教会(EOCと略す)、エチオピア・インターナショナル・コンGRES(EICと略す)、十二部族)について紹介した。

今回はまず、表現内容の考察を別のグループについて行う。次いで、総括してナイヤビンギ音楽の機能的側面(象徴と意義)を扱い、ジャマイカ社会、文化への影響にも若干触れたい。

四、ラストファリア讃美歌の表現(続)

4 表現の内容ー歌詞ー(続)

(e) 「神権政治」

このグループには、一九四七年頃には出現していたとされる「ドレッド・ロックス」(Dreadlocks)が多くいる。しかし、他の諸グループと比べて顕著な特徴を剔出するのは困難である。例えば先号で紹介した三グループと比べると、かなり緩やかなグループである。何人かのリーダー格を中心に、内部でさらに幾つかのバウンダリーの緩やかなグループに分かれている。また、各々の相互関係も曖昧である。グループ全体に特徴的な音世界の存否も漠としている。個性の強いグループの特徴は、必ずしも音の表現と結びついていないようであった。それだけ、グループ・アイデンティティが強いラストファリアンたち(このグループの場合、自称「ドレッド派」が多いが)の粗野な表現様式、

と見ることもできよう。

彼らによると一年に一回、ラスタファリアンにとって記念すべき事柄に合わせて、大ナイヤビンギを聞くことにしている。多人数を集め、ある程度の期間（筆者が部分参加したのは約一ヶ月間のもの）共住生活をするので、少なくとも参加者の間でのグループ・アイデンティティは強まるようである。〔例6〕はある夜歌われたものの一つであるが、ムードが高揚すると歌がまるで伴奏のように聞こえる程、叫びに近い言葉が凌駕することもあることを示している。〔 〕内のみが歌詞としてメロディーを伴って歌われ、あとは何人かが口々に合の手のように、ドラムのリズムと詠唱を聞きながら半ば無意識のように反応——複雑な刺激—反応連鎖——して大声で呼びかける部分である。ただこの場合、両者は呼応方式に還元してよいと思われるが、どちらも「呼」とも「応」ともなり得るという柔軟性がうかがえる。

〔例6〕

Jah! Rastafar-I! Ban Babylon! His Majesty!
Wicked fe^{*1} it. Nyabinghi!

[Zion I want to go]

Lightening-I, Rastafaar-I! Listen again culturally:
No weary, Jah Rastafar-I.

[Rastafari neba tun I down^{*2}; I-an'-I trone^{*3} Rastafari journey home]

Woe to those who hear thy word and harden thy heart.^{*4}

[Clean thy heart, humble thyself, and brain thy God^{*5}]
Leave Babylon and come; without I^{*6}; I must die;

[Oh Zion, I want go]

Oh, Oh, Zion, I want to go;

Lightening; A new king must come;

[Upon I trone^{*3} Rastafari sit and rule

・
・

Through the love of Zion, Selassie I, Nyabinghi, Triumph (ant); The First Order, the order of Melchizedek, Rastafari, Jah Rastafari! Weed out transgression! Earthquake! Thunder! Love! I-an'-I live in justice; Rastafari live; Jah! Irie-I! Give t(h)anks and praises to His Imperial Majesty, Emperor Haile Selassie I ……

*1 “fe”= for

*2 “neba”= never, “tun”= turn “I”= me, us

*3 “trone”= throned “h” 音は発音されないことが多い。

*4 初めの thy は「神としてのラスタファリ（セラシエの）」あるいは「聖書の」後の thy は「自らの」を指す。

*5 “brain thy god” は「汝の神（ラスタファリ）を頭／知性（知恵と知識）をもって崇敬せよ」、「汝の神と頭を同じくせよ」等の意味。

「汝の（セラシエ以外の神としてはならない）神（god）の頭を打ち砕け」（つまりセラシエのみを唯一絶対の神（god）にせよ、という意味）とも解釈可能。

*6 この “I” はラスタファリを指す。

*7 以下は何人かが口々に叫んだ言語表現で必ずしも前後関係は直接的意味で連繫されているわけではない。多様な象徴作用を有する単語群が多い。

*8 “Irie” は「気分が良い」「幸せである」「満足である」等の主観的判断に基づく「良い」「美しい」「素晴らしい」「この上ない」といった意味。この場合、最後にも “I” がついて、強調している。

歌詞は宗教性に富み、キリスト教讃美歌にも繰り返し出てくるテーマと同じである。目指すはシオンであり、神は決して信者を落としめない。この世の生活は本来の家、魂の故郷への旅（地上の旅人のイメージ）であり、それは神が導くものである。信者は心を聖く、身を低くし、知性を尽くして神を崇めねばならない。神は王でもあり、御座にいましてこの世を統べ治め給う。こういったテーマを取り込みながら、ラスタファリアンたちはシオンを「エチオピア」と解釈し、アフリカ回帰の願望を言い表わす。そ

して「神」をラスタファリ、セラシエとすり変える。

このように一見穏やかなすり変えは、実はかなり攻撃的な側面と裏腹になっている。それが端的に表現されているのが、叫ばれるいは語られた部分である。例えば「バビロンを破門せよ（禁ぜよ）」（Ban Babylon）、「邪悪には邪悪を」⁽⁵⁾（Wicked fe it）、⁽⁴⁾「ナイヤンギンギン」⁽⁵⁾「稲妻」（“Lightening-I”）

「御言を聞きながら心を頑なにする者に禍を」等の表現は、「稲妻」は曖昧だが対象であるバビロン、つまり一般ジャマイカ人や社会に向けての警告である。「ナイヤンギン」という表現は、ラスタファリ運動初期の頃は、「白人や抑圧者に死を」を意味していた。それがいつの間にかグラウネイションを指すようになったりまた縮少形「ビンギ」と愛称されるようになり、過激な思想内容が薄らいできている。（この変化は、特に黒人層対混血／白人層の社会関係が少しは改善されてきたことをも反映する。）しかし現実の厳しい社会的状況下で内的外的圧力に触発され、「平安」を乱され、不安、不信、不満、怒り等を払拭する捌け口として「ナイヤンギン」と叫ぶことも少なくない。

また（例6）の後半部分には、雑多なイメージを連想させる表現が並んでいる。前後関係が一見唐突で、そこに深い必然性を直接見ることはできないが、渦巻く深層心理から誘引され、やや定型的ではあるが（彼ら）独自の言語表現となったものである。例えば「勝利」⁽⁶⁾、「原初の秩序、メルキゼデクの秩序」、「地震」と

いった表現も、各々日常的な意味以外にも拡張して、彼らなりの解釈を施した意味世界を構成している。

「勝利」は、「勝利の教会」(Church Triumph (ant))というグループを形成する程、重味を持つ言葉である。これには、キリストの「王」としての凱旋、「世に勝つ」という意味等の聖書的イメージによるものと同時に、白人優越主義から黒人優越主義への転換、黒人の主導権の存在と堅持、黒人抑圧者への勝利、墮落したキリスト教に対する「再来のキリスト」ラスタファリの勝利、バビロン(ジャマイカ)に対するシオン(「エチオピア」、アフリカ)の勝利等々の意味がある。

「原初の秩序、メルキゼデクの秩序」では、まず新大陸における黒人奴隷制の開始以降現在に至るまでの全社会制度(「バビロン・システム」)を無秩序、カオスと見做し、その打破を訴える。「新しく」導入されるべきものは、「正義の王」、「いと高き神の祭司」、「永遠の祭司イエスの型」であるメルキゼデクの永遠の属性、またその絶対性の秩序である。ユダヤヘブライ的秩序をいったん否定し、新しい秩序の構成を意図したイエスを全く認めないわけではないが、ラスタファリアンが最も惹かれ使用するのは「創造の秩序」であり、創世記のイメージである。そして「原初」は「アルファでありオメガ」⁽⁹⁾と結びつき、新しき天地創造の地、千年王国は、人類始祖の地エチオピアアフリカと規定する思想と繋がる。

「地震」は「稲妻」同様、人間に自然界の不思議、畏れを与えるものであるが、自然界の創造神をやはりラスタファリと結びつけ、神の存在と何らかの意志伝達を知らしめるものと解される。そして「自然の秩序」の意義や重要性を訴え、その自由な解釈をもって「人間の本性」を説明する有力な証拠とする。彼らの確信と自負心は、「バビロン」に対する警告を発するまでもに至るのである。

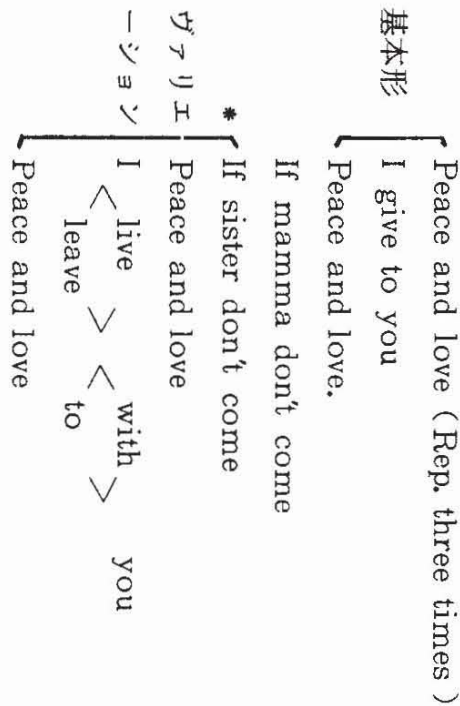
(f) Mystic Revelation of Rastafari (MRR)

このグループは、ナイヤビンギ音楽の創始者であり熟成者であった故カウント・オシー⁽¹⁰⁾(Count Ossie)を核に形成された。当初より共に労した古株のメンバーや著名な音楽家(主に管楽器演奏家、コーディネーター)セドリック・ブルックス⁽¹¹⁾(Cedric Brooks)も加わっていたこともあり、音楽的な開花を遂げた。彼らのグラウネイションは、グループ独自の音楽の創作の場でもある。讃美歌や民謡、ラジオ等のメディアを通して接した海外のポピュラー音楽も借用、変形し、インスピレーションの源泉として展開させるものが少なくない。そのほとんどは特定個人の作ではなく、グループ全員の貢献によるもの、と彼らは強調する。そこには個人の名誉欲など無意味で、個人を繋ぎ個人を超えてグループの存在を意識させる協調性、寛容性が見られる。

グループ「C・オシーとMRR」の存在は、音楽界で注目を集め始めた五〇年代⁽¹²⁾より知られ始め、名声を博するまでに至る。そ

それはグラウネーションが音楽を生み出す場のみならず、練習・熟成・洗練の場でもあったからであろう。時間的制限を設けず、気の向くまま音を出し、確かめ、楽しむことが、彼らの音楽的感性を磨いたと考えられる。そして洗練度の高い曲は、コンサート⁽¹³⁾やレコード⁽¹⁴⁾を通し、またそれらがラジオ番組を通して、多くの人々に聴かれてきた。

〔例7〕



* ここより2行、変曲されているが、3行目よりまた基本形に戻る。

最もポピュラーでノン・ラスタファリアンにも比較的よく知られている曲に、「平和と愛」〔例7〕(旋律は先号(楽譜4))がある。そこで指摘されることは、社会に現存する平和と愛の欠如である。ヴァリエーションは、社会で支配的に見られる母親中心的(matrifocal)

家族構造を反映している。父親不在の大きな社会問題に対して、平和と愛という最も普遍的な価値と同様、聖書を借りて「夫」の責任と父親の権威の回復を訴える。平和と愛はラスタファリ運動のモットーとして知られている。

〔例8〕

No night in (Mt.) Zion (I)
 There is no night there
 Hallelujah there is no night there
 Rastafari is our King
 For King Rasta is the light
 And we > need no < candle > light
 I-ah-I other
 Hallelujah there is no night there

() 内はヴァリエーション

< > は繰返しになって表われる表現

下線は「dja:」と発音

〔例8〕は聖書のイメージ(黙示録二二章五節)を土台に、ラスタファリ思想がどのように展開するかを示す。い・わ・ゆるキリスト教(ラスタファリアンが好んで用いる表現でもある)とは一線を引いていることを、例えば先号で見た例と同様、「アレルジャ・ー」、「ラスタファライ」、「アイ・アン・アイ」の使用で明示する。「シオン(の山)」は「エチオピア」を意味する。〔例9〕はそれ

や聖蹟した語いふん。

(例9)

The Rasta Man
Black Man
I-an'-I
Haile Selassie live a Man' Zion I
Ethiopia is Man' Zion.

Come from Man Zion(I)

*1 Man'' = Mount

*2 a'' = in パトロ (ジャマナカ英語) ではよく使用される。

*3 Zion I'' の 'I' は強調表現

[例10]

You < cannot
can neba > get to Zion wid a carnal min'
(Rep. twice)

Carnal min' have to stay behin'.

* wid '' = with

* min '' = mind

(例11)

Is your name written there in Jah Lamb's Book of Life
(Rep. three times)

Will you ask yourself the question ?

Is your name written there ?

ラスタファリ運動がブラック・リヴァイヴァル派の伝統から生まれ(先々号参照)、また音楽面での借用も多かったことも、これまでの若干の説明で明らかになったことと思う。ところで、音楽的に独自性を発揮するMRRにおいても継承の事実が認められることは、注目に値する。[例8]や若干[例9]からも影響を見てとれるが、[例10][例11]はさらに顕著である。キー・ワードの変換で全体の色合いを変える方法である。[例10]の「シオン」は元は「天国」である。[例11]の「子羊の」の前に「ジャー」を置くことにより、アイデンティフィケーションは塗り変えられ

る。

[例12]

1. So long Rastafari call you, so long (Rep.)

For the enemy around you/I

Trying to devour you/I

2. So long Babylon a hold I, so long (Rep.)

For the enemy around I,

Trying to devour I

So long Babylon just a hold I, so long.

3. So long Babylon just a drag I,^{*1} so long (Rep.)

For the rich man dem dem happy,^{*2}

Do no wan' give to natty^{*3}

So long Babylon just a hold I,^{*1} so long.

4. So long Babylon a hide de trut' from I,^{*1} so long (Rep.)

< Jah Rastafar-I ! >

For dey mek dem a talk de version,^{*4}

An' lef' de King James Version

So long Babylon a hide de trut' from I,^{*1} so long.

< No long time, dread ? >^{*5}

< Yes-I, seen >^{*6}

5. So long Rastafari call you, so long (Rep.)

< Watch ya breddar,^{*7} Rasta ! >

< So long Rastafari call you, so long >

So long dem a rule I^{*8} I^{*1} wid a gun an'

bayonet, so long (Rep.)

For di enemy round I,^{*1}

Trying to devour I,^{*1}

Dem a rule I^{*1} long time wid gun an'
bayonet so long (Rep.)

< Jah ! >

A long long time, so long

W(h)at a longer longer longer iwa,^{*9} so long

Rasta Bongo Natty Dread, so long

Ia Ia^{*10} dread locks I, so long

Jah Jah children^{*11} wan' go home, so long

Longer, longer, longer, long long long, so long

A longer different, a longer different, a long, so long

< Jah ! We waan go home now,

Free up de kali,^{*12} now,

So long, so long, right now, so long ... >

< >内は歌詞でない挿入のかけ言葉

*1 繰り返される時に "I" となり、これは "I-an'-I" と
同じ意味

- *2 "dem"=them, 全体の文章としては "...man are happy"
- *3 "natty"=knotty=the knotty dread 「ドレッド」と呼ばれる長髪のラスタファリアンを指す
全体としては "〔They (=The rich man)〕do not want to give anything to the knotty dread"
their happiness
- *4 For they< have made and talked >(of the Bible)
make and talk of a vesion
- *5 反語表現 "Isn't that long time, dread?"
で、"dread" は呼びかけ
- *6 "I" は強調。"seen" =I understand
- *7 "ya breddar"=your brother
- *8 "dem a rule"=they< have ruled rule
- *9 "iwa"=time
- *10 "Ia"=Iya=Nya(bynghi), Rasta(man)
- *11 "Jah Jah children" =「ジヤーの子供」=「ラスタファリアン」
"Jah"=Jehovah "Jah"=Jah
"Jah"=Jah "Jah"=Jah "Jah"=Jah
- *12 "kali"=ganga, marihuana
"free up"=legalize

〔例12〕(旋律は先号〔楽譜6〕)もヴァリエーションの多様性を示す。挿入部分のいわゆる掛け合いは、これまでと同様、前後の歌詞と応答関係にある。基本旋律の繰り返しの中で、回を追うごとにヴァリエーションの楽しさを増すが、それはリズムにも言語表現にも表われる。奴隷制開始以来の長い期間、支配者という敵に囲まれ、暴虐の対象となってきたことを歌う。敵はバビロン。金持ちは、ラスタ(ファリアン)はナティ・ドレッドはジャの子らを捕え、引きずり回し、銃剣をかざして支配と暴利を貪り、あるいは聖書の真理を隠蔽し欽定訳のみを正統としてきた。ラスタファリは呼んでいる。故郷シオンはエチオピアへ帰りたい。聖なる知恵の草ガンジャも解放せよ……。ここでは「げに長き間」と「今し」を対比させ、常に歴史的現在を座標軸の一つとして持つ世界観を提出している。

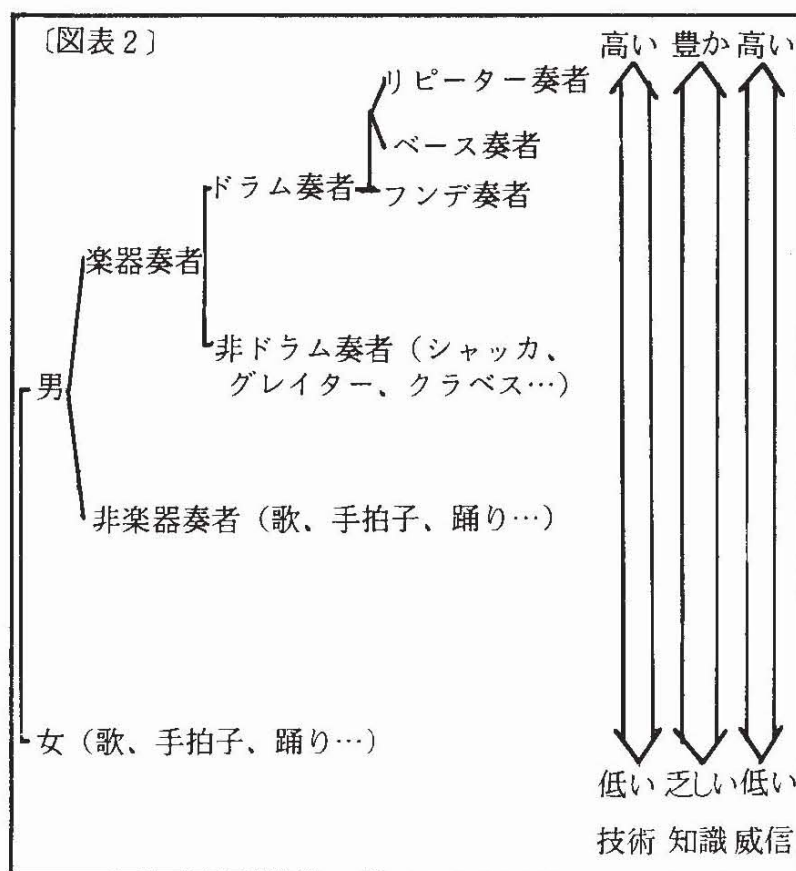
五、ナイヤビギ音楽の機能的側面

— 象徴とその意義をめぐっての一考察 —

1 問題

ここでは楽器(音)、リズム、旋律、歌詞、そしてグラウネーションについて、象徴と機能に焦点を当ててその意義を若干考察したい。重点を置くのは、「原義的」意味(エミック)である。

ところでナイヤビギ音楽に関しては、いわゆる専門家と非専門家の二分が困難な程、専門分化は発達してはいない。知識の量と質は、当然ながら個人差とグループ(帰属していれば)の特徴



に大きく左右される⁽¹⁸⁾。オシーは名実ともに、グループ内のみならずラストファリ音楽全体を代表する専門家と見ることができたが、彼の没後、匹敵するような人物は現われていない⁽¹⁹⁾。しかし、各グループ内に独自の音楽を中心的に担っている擬似専門家とも呼べる者は、複数存在する。擬似専門家の位置を見るには、〔図表2〕の分類が参考となろう。ドラム奏者のカテゴリーがほぼそれに当た⁽²⁰⁾るであろう。

この二分法分類の規準は、楽器を演奏する／できるか否か、ドラム奏者か否か、そしてフンデのみかベースやリピーターの専門的地位があるか否かで見える。一般的には技術、知識双方において、リピーターを頂点として段階的に高度あるいは豊富になる。楽器奏者のこれらのヒエラルキー的地位(彼らは「平等」を主張するので、このような表現は否定するであろう)は、生得的でなく事後的に達成されるものである。流動性はあるが、獲得した地位はほぼ固定される。概して長老格、グループ・リーダー格、音楽的技術に長けた者、利発な者、知識欲旺盛な者、アイデンティティ追求・検証に熱心な者たちは知識量も豊富で、それなりの尊敬を集める。威信も、リピーター奏者に近づく程高くなる。

2 楽器及び楽器音とリズム

楽器(音)とそのリズムで、原義の意味が最も豊富なのはドラムについてである。ドラムの重要性は男女を問わず、また擬似専門家如何にかかわらず認められる。それは「アフリカ／エチオピア(の)」と言ってアフリカ／エチオピア起源からアフリカやエチオピアそのものまでを意味したり「黒人のルーツ」あるいは「創造の」原初の「から」ダビデが奏した「楽器等々」とまで説明される。大別すると、アフリカ／エチオピア起源、黒人起源、聖書起源に集約される。またこれらの総体は、ラストファリアン・アイデンティティを意味する。彼らの認識体系の中では、聖書記事を中心にアフリカ／エチオピア、黒人が置かれ、矛盾なく統合さ

れている。

ドラムは、グラウネーションでは奏者が円形(先号[図4]参照)になるか目立つ所に配置される。礼拝形式や内容が正統派キリスト教に酷似しているEOCやEICでも、楽器の位置は前方で「聖所」に近くなる。ドラム無しには「ビンギ讃詠」は始まらない。一曲を通じてリードし、終わりを決め、次の場への移行も導く。楽器が少なくても、音が吞まれることは稀である。常に見、聴かれる。ドラムのみの華麗な音の饗宴が繰り広げられるとき、むしろ人声はあたかも異物であるかのように後退する。掛け声は即興的、半意識的応答で、楽器と奏者に刺激を増し加える。ドラムはまさに中心的存在である。

またドラム叩きはより実地的な意義を持つこともある。V・レコードは、欲求不満や悪感情の捌け口となり、新たな活力を与える役割、軽度の身体的不快(頭痛、熱、悪感)の解消機能も、MRRの「兄弟」から聴き取っている⁽²¹⁾。身体運動による効果と結びついているのであろうが、これらの発散効果は実は重要な役割を果たしてきたと考えられる。つまり日頃鬱積される「抑圧状態」が暴力の温床であるにもかかわらず、その否定的な力はドラム、ひいては音楽と宗教に向けられたことが多かったからである。

ところで「アフリカ」が強調されるにもかかわらず、西アフリカで見られるような豊かなシンボリズムはここでは失われている。ドラムでさえその部位にまで、祖先から継承された入念な象徴的

意味が付与されているとは言い難く、また製作行程、材料についての規制やタブー等も、特に発達しているわけではない。ただし音の生成に関わる要所の皮膜(ヘッド)には、若干の説明がある。ベースには多くの場合、牛皮や羊皮がその低音性を理由に使用される。オシーの説明によると、雄山羊皮が最良である。それは雄山羊が雌山羊よりもおとなしく、鳴き声も低いからという。フンデにも雄山羊皮が使われる。リピーターはベースと逆の理由により、雌山羊皮を最高とする⁽²²⁾。その他雌山羊皮の柔らかさと滑らかさが繊細な音を生む、という説明もある。(しかしこれらからドラム(音)の総体が男女の結合を意味する、といった解釈は必ずしも聞かなかった。)

楽器演奏及び楽器音が「語り合い」、つまりコミュニケーションの役割りを果たすことは確認される。しかしその内容の解釈は当事者にとっても「不明」とされることも多く、混乱している。それはトーキング・ドラムの「言葉」とは、全く異質のものである。「兄弟」たちの説明によると、楽器(ドラム)音とリズムの総体「リディム」(“Ridim”)は「ルーツ」であり、「男性的」であり「自然」である。特にフンデその他による二拍子音は「心音」を意味し、敷衍して「人間の生命」、「セラシエの鼓動」、「神ジャーの存在」の象徴となる。彼らが強調するのは「リディム」の人類普遍に訴えるところの根源性である。

また西アフリカで部分的に見られるドラムの聖化は、ラスタフ

アリアンの間では必ずしも一般的でない。E I Cと神権政治グループの一部ではドラムの聖性を強調するようだが、聖なる時と場における媒体としての役割を果たしていると指摘する方が多い。

ところでドラムの中心（生命線）フンデからも（雄・山羊皮、低音）、「リディム」からも（セラシエ＝男性神）、男性原理が中心的存在することが認められよう。また楽器作製から演奏に至るまで、通常その担い手に女性を含まず、かつそれを一種の規範にしているという意味で、男性原理の優越が見られる。技術、知識、精神の伝授や習得は、男系を通じてなされる⁽²⁴⁾。特に演奏（公的場）における女性の参加は、ほとんどタブー視されている⁽²⁵⁾。女性は聴き見、動きの激しくない踊りで反応し、前面に登場しない。女性は主役になれず、ならない。（ほとんど無視されるような雰囲気さえある。）

この男性主導の秩序は、男性のみならず女性にも一種の納得と満足感を与え、それに異議を唱える者はいないようである。音における女性の受動性、消極性は、創出された小世界での男性の積極性、優位性を際立たせる。これが男性の存在意義を高めることも明らかである。

この男性原理は元来、聖書に由来すると思われる。またラスタファリ運動の大多数を占める男性の、事実上（数字の上で）の優勢も基盤となろう。しかしここで注目したいことは、別の局面で女性原理の優越が存在することである。前にも触れた女性中心の

家族構造（matrifocality）もその一つである。また（ラスタファリ運動の母体となった）ブラック・リヴァイヴァル派の諸集会でも、女性が過半数を越すことが多い⁽²⁶⁾。リーダー格にも女性は見られる。一夫一婦（妻）制あるいは核家族制度を理想型としながらも、現実にはそれらの不安定または崩壊のパターンを繰り返す「バビロン」社会の中で、ラスタファリアンたちは対抗意識をもって男性原理を今一度唱える。そして聖書の権威を借りて、「正統」で「自然」な秩序の回復を訴えるのである。

ところで「自然」主義は、まさに彼らが使用する楽器のほとんどが、自然物の一部（木の幹、枝、さや、種子、ひょうたん、小石、動物の皮革等）で賄われてきたところにも、由来する。

「神」の創造による自然に依存し、恩恵を受け、感謝する。自給自足を「原初」的形態とし、理想化する。自然（界）自体を神聖化する説明は少ないが、その一部としての人間とその身体を神聖視することも多い⁽²⁷⁾。

楽器は材料の取捨選択から最後の仕上げまで、人の手によって為される。楽器を介して手で創り出される音とリズムは、究極の創造主（神）への感謝、讃美である。楽器に限らず、「自然」に重要な意義を付与する彼らの自然主義は、乏しい物質生活を受容し、（自給自足が可能な限り）むしろそれを良しとさせる機能も持つ。またこれは、所与の環境を再評価させ、積極的に活用することによる環境への適応の一形態でもある。そこから生まれるゆと

り。精神・情緒活動を活発化し、それは豊かさをも示す。彼らの創造活動は、所与の環境を自在に採り込んでのものである。楽器及び生み出される音とリズムとは、自然との対峙ではなく、協調、調和の所産とも言えるのである。

3 旋律と歌詞・歌

これまでに見たように、楽器音とリズムの組合せは、セット（リディム）としてもまた象徴となる。ほぼ同様の図式が歌にも成立する。手段、媒介、記号としての旋律と言語（歌詞）が結合し、表現体（セット）としての歌となる。音楽的象徴では最も意味論的側面が強い。ここでは象徴的意味でクローズアップされるべき若干の問題を取り上げたい。

第一は宗教性についてである。これまでの歌詞が如実に示すように、「讃詠」には宗教的キー・タムが満ちている。アフリカ／エチオピア帰還の希望及び権利の主張、奴隷制の悪の告発、また道徳的高揚、普遍的人道主義の提唱といった内容も、実は聖書用語で包まれ、聖書の知識無しには歌詞の象徴的意味も、本質も把握できない。歌詞を通しての信仰告白、希望（願望）や期待の表明と理想化は、歌う行為によって主体化され、ラスタファリアン・アイデンティティが確認、強化される。

この宗教性は、信者の歌という共有性と結びつく。ほとんど常に集合体として歌われる。基本形も単純なものが多く、共有され易い構造である。ただし、複雑なヴァリエーションを行うのは、

音感に鋭く技術的に秀でた者たちが中心となる。基本形とヴァリエーションの相互作用と均衡関係を聞き、歌い楽しむこともできる。同じ歌を同時に歌うことのみで、同じ意味と感情移入の共有を期待できないが、少なくとも調和、一致の精神が無ければ合唱とはならず、宗教歌では特にその効果が期待される。

第二点は、キリスト教的世界観についてである。彼らの聖書主義は、正統派キリスト教的なものと対峙する。ラスタファリ運動には、聖書記事のコンテクスト解釈を教え、また規制する内部の制度は、グループの範囲を越えるものではない。徹底した聖書依存と祈りにより、独自の解釈をする。「回心」ではなく「啓示」により「生得の観念」を知り、ラスタファリアンであることを自覚する。夢やインスピレーション等による個人の自由裁量が、むしろ重視される。解釈は「談合」により確認、強化される。そして正統派キリスト教を「反キリスト」、「にせキリスト」派と見做し、解釈のコントロールによって聖書の真理を曲げて教えてきたと非難するのである（先号〔例1〕、本号〔例6〕〔例12〕）。

しかしこれらは、プロテスタントの一部にも見られることである。聖書のみが信仰の原点であり原典である。神と個人の間に救世主以外の権威（教皇〔庁〕）を置かない。個人主義と体験主義の重視。形骸化したと見做す従来の秩序／信仰体系への批判・挑戦の重要な一形態としての分離。新しい解釈に則った意味、信仰体系。秩序の再構築……。

〔表2〕

ジャール、ラスタファライ、セラシエーアイ 王なるジェサス、皇帝、新しい王 エチオピア 故郷(家) シオン シオンの山 (小)羊 生命の書 光 ラスタ (マン)、ボンゴ、黒人 ナティ・ドレッド アイ・アン・アイ 赤・金(黄)・緑色(の組合せ) 生命 平和 正義 真理 今し カーリ(ガンジャ) 最初の秩序、メルキゼデクの秩序 ☆愛 ☆ナイヤビンギ ☆勝利 ドラム (打楽器) グラウネイション	〔(キリスト教の) イエス・キリスト〕 〔エリザベス女王〕〔ジャマイカ首相〕〔総督〕 バビロン〔ジャマイカ〕 ヴァチカン 谷(死の陰の谷) (狼) 欽定訳聖書 夜 金持ち〔白人〕〔抑圧者〕 〔禿げ〕 奴ら、敵 死 銃 罪、違反、邪悪、肉欲的な心 げに長き間 〔ラムその他の強いアルコール飲料〕 〔バビロン・システム〕〔混乱〕 〔ギター〕(特にエレキ・ギター) (弦楽器、管楽器、鍵盤楽器)
--	---

☆は対として表現されるものがない。敷衍して考え出すことはできるが、ここでは明示しない。

詩篇二三章四節
 民間信仰のオビアやパ(ポ)コマニア、アフ
 リカン・メソディスト監督シオン教会等のリヴァ
 イヴァル・シオン派(ブラック・リヴァイヴァル派)
 で使用される色の象徴体系。
 ただし、「黒」と「白」は曖昧さを含み、コンテ
 クストによって異なる多義性をもつ。

つまり、彼らが非難、否定するキリスト教の（特にローマ・カトリックが敵意の対象であるがその）特徴を、計らずも自らのうちに取り込んでいる、という自己撞着が見られる。ラスタファリ運動を、キリスト教の再活性化（revitalization）あるいは土着主義（nativism）とする見方も、ここから出てくる。

第三点は、象徴二元論的世界観についてである。「表2」では、歌詞〔例1-13〕から直接抽出できる表現を並べてみた。「」内は、歌詞に暗示されている（または別の歌詞あるいは談合でよく使用される）言語表現である。楽器とグラウネーションは直接歌詞に表われないが、彼らの象徴体系の中では比較的明確なので列挙してみた。（しかし現実には、個人歴とグループの性格にもより、ドラム以外は意見が分かれる。）事例数の限定により、付随あるいは派生する二項対立、ラスタファリ下位文化とジャマイカ文化との比較から指摘できる要素は含めなかった。「ライオンとアナシ（蜘蛛人）⁽²⁸⁾」、自然と人工、「アイタル」料理（塩抜き、特に豚肉忌避）とジャマイカ料理（塩、香辛料豊富）、（特に）女性の長衣（スカート）とスラックス（男―女の対立より）、非産児制限と産児制限（「家族計画」）、性行為の「正常位」と「69」、父親中心家族と母親中心家族、純血主義と混血、自給自足的生活と金儲け等々）また黒、白、赤の色の両義性、火や煙の象徴、政治の忌避（「politics」）月経血の汚れ等も重要な考察対象である。

この表で明らかのように、彼らの象徴二元論は基本的には

ユダヤ・キリスト教的象徴体系に則っている。そして植民地主義を代表する象徴に負の価値を付加し、ジャマイカ社会と文化の上部構造に非難の鋒先を向ける。ところで彼らが概念として求めた枠組が、ジャマイカ社会で一般的に高い価値が置かれるキリスト教であることは、実はラスタファリ運動が継続、発展しえた理由の重要な一要素である。その共通性ゆえに、伝統的なキリスト教にも重要な刺激を与え、活性化してきたのである。

〔例13〕

Send me back to Ethiopia

An' mek me mark out mi^{*1} burial spot^{*2}

'Cause if I (mi) die before de day

My duppy will be going away

*1 mek=make

*2 mi=my

最後に、アフリカの伝統継承についてみよう。明らかに西アフリカの価値体系は、ほとんど歌詞に表現されていない。しかし実は、例えば〔例13〕に見られるように、民間信仰の影響が若干残されている。死者の霊「ダッピー」(duppy)⁽³⁰⁾は好例である。一般にラスタファリアンは死を否認し、肉体の死を信じない⁽³¹⁾。死についての言及さえ忌避する傾向にある。それに代わって、「永遠の生命」(キリスト教の影響)と永劫回帰との共通性もある「再生」(reincarnation)の思想を盾にする。(しかし「再生」観念もラ

スタファリアンに特有のものではない。)

民間信仰にはこの他、アフリカ文化の遺産とされる諸要素が多く見られる。しかしラスタファリアンは、上部構造としての西欧(特にイギリス)文化の浸透性(「洗脳性」(whitewash)の強さを理由に、アフロ・ジャマイカ文化の「アフリカ」性を否定する。彼らのこのような自己矛盾は、キリスト教文化の影響力の強さをも裏付けるわけである。

4 グラウネイション⁽³²⁾

原義の意味レベルでまず説明されることは、「共に集まる」、「ドラムを楽しむ」、「礼拝する」、「讃美する」、「ガンジャを吸う」、「踊る」、「談合する」等々、グラウネイションという場での行為が中心になる。それらの行為にはまた各々拡がりを持つ意味が付与される。その形態は多様であるが、各自が自分たちのグラウネイションを「自然」で「原初」のものだと確信している。「自然」で「原初」のものはこれまでも触れたように、「聖」の領域に近いものとして解釈される。直接娯楽(“heartical”)を目的に「ビンギ」(グラウネイション)を行うことはあるが、それでも歌は宗教性を含み、ガンジャ喫煙にも聖的意義が付与される。総じてグラウネイションは、「真の」ラスタファリアンが共同で「絶えざる感謝と讃美」を捧げる儀礼の場である。グラウネイションでは共に集まり、共通のことをし、感情も共有できる。そこには協調性、調和、一致無しではグラウネイションは根本的に機

能しない。集会が参加者にとってこれらを意味するものとなるために、音楽は極めて重要な機能を果たしている。

音の調和は会衆の統合を強化するが、音の不一致あるいは不協和音が目立つ音楽は、演奏者や合唱者に不快感を当然与える。音の創造者は一致させる努力をするか、切りの良い所ですぐ止めようとする。そのような時には仮に一曲が終わっても、全員の調和や一致からはほど遠い感覚が残る。

またグラウネイションの共有性は特に小グループの場合に顕著だが、そもそもそれを始める時から問題とされる。例えば始める前から主要メンバー間に争いや悪感情がある場合、それを理由に延期あるいは中止されたこともあった。しかし音楽を通しての共同作業、同じ信仰告白、「聖杯」(ガンジャの水煙管)の回し飲みをするうちに、和解する気持ちも出てきたことを示した例もあった(MRR)。グラウネイションによって不和を生んだという話はこれまで聞いたことは無く、少なくともそこで生まれる調和、あるいは調和を生み出すための協調性等は、一応機能していると言えるであろう。

儀礼としての側面で注目されるのは、非形式性である。よく尊重される「自然」、「自由」、「意志」等の観念は、EOCやEICを除いて、集まり自体を自ら非統一的なものにしている。キリスト教諸教会の礼拝でその時間的配置順序が決まっているのに対し、そのアンチ・テーゼを示すかのように、ラスタファリアン・「ビン

ギ」は不定であり、中心的「兄弟」(brother)によって恣意的に決められる。開始も終止も曖昧である。長さも不定で、形態も形式も不統一である。内容も多様である。例えば、聖書朗読や聖書講解、あるいはそれに則った談合が無いことも多い。(歌とその合間に発する呼びかけから、言語的に明確な信仰告白や祈りが聞かれるのみである。)また中心的な役割を果たすドラムにさえ、奏者の交代も見られる。技術がさほど問題視されないフンデではむしろ、叩かれて音とリズムが出されているかがより問題にされるのである。しかしグラウネイションに見られる非形式性であっても、ラスタファリアンに特有のものとは言えない。(アフロ・ジャマイカ文化伝統の中にも見られる。)またこの非形式性の中にもそれなりの秩序はあり、規範となっている部分もある。男性原理はその好例である。前に触れたもの以外にも、例えば女性に対しては、男性よりも細かい「規則」が定められていたりする。ドレッド・ロックス如何にかかわらず、必ずかぶり物を着け、肌を隠すべく長衣をまとうこと、グループによっては女性による調理の禁止(「穢れ」の防止)等々が挙げられる。これらは男性の優越性を明示し、男性への従順を要求し、それを「自然の秩序」(男性優位の小世界)と位置づける。

またこの集まりは、相互コミュニケーションの場でもある。個人と神、信者と神という縦の関係のみならず、「兄弟」「姉妹」同士の横の関係も当然強調され強化される。新しい人的ネットワークの形成

もある。日頃溜った不満や悪感情の捌け口としても(ナイヤビンギ音楽そのものも大きな役割を果たすが)、コミュニケーションによる相互作用の機能も見逃せない。これはラスタファリ運動全体の中でグラウネイションを位置づけ(「位置的」意味)するときにも言えることである。

また、ラスタファリアンが多勢で公然とガンジャを吸える機会を提供する。グラウネイションが儀礼の場である限り、ガンジャは「聖杯」の象徴として外部者に対しても機能する。ジャマイカでは表面上、栽培も売買も法で禁じられているが、グラウネイションの最中に警官が取締りをすることは、(少なくとも最近では)ほとんど無いようである。ガンジャは仲間には分配される。各人が紙に巻いて吸い、それを他の仲間と共有することもある。MRRでは水煙管を男性たちが回す。この匂いは彼らにとって至上の馨しい香であり、「聖なる知恵」を授く物、「国家/国民を癒す力」、またそれを媒介にジャーとのコミュニケーションを促進する、といったシンボリズムが働く。またこの匂いは煙草やアフロ・ジャマイカ宗教でよく用いられるラム酒の匂いと対峙し、暗に一般ジャマイカ文化、社会、アフロ・ジャマイカ文化へのアンチ・テーゼを示しているとも考えられている。

グラウネイションをラスタファリ運動全体の中で位置づけると、他に「公同教会」が無いラスタファリアンにとって、まず儀礼の場であり、それ自体が礼拝をも象徴するのである。またEOC

とE・I・Cの儀礼を除いて、その形態と内容は自由（非形式性）と協調、「平和と愛」による一致、和、親睦（友誼）等を表象している。また音の創造から成熟までの過程をも示すものである。ここでの音楽と踊りはまさに娯楽、喜びでもある。そしてこのようなあり方自体が、「談合」による知を得ることの意も含めて、教育をも表わすことになる。グラウネイションの多義性は、多元的機能に繋がるのである。

以上見てきたように、ナイヤビンギ音楽はまず、ラスタファリ信仰の讃美歌である。その信仰体系が不変の教義として定着しているのではなく、むしろ常に信者によって変化させられている。そしてそれを反映して、新しい歌は生み出され続ける。ナイヤビンギ音楽は、音楽の場、それを通じての共働作業、共通体験によって、信仰を再確認し、一致の精神を高揚させる役割を果たしてきた。グループを越えて共通の歌が歌われるわけではないが、歌われる内容にグループの分派主義は表面化しない。むしろラスタファリ信仰という特異性をも越えて、人類普遍に訴える主義主張こそ強く認められるものである。そこにはレゲエに見られる戦闘性、直接的攻撃表現は無い。いや潜在しているが、顕在化するものは、あくまでも聖書的表現であり、信仰の表明、「讃美」なのである。

六、結びにかえて

ラスタファリ讃美歌は、一方では「抑圧者」に対する鬱憤を平和的に解消する創造的な装置でもある。外部社会「バビロン」との軋轢、迫害からの逃難場ともなる。「バビロン」に対する「ジャー」からの予言と警告を発する「武器」として、「リデーム」と「讃詠」は鳴り渡り歌われてきたのである。

ラスタファリ讃美歌で強調される「アフリカ（エチオピア）帰還」は、彼らの「アフリカ（エチオピア）人」としての主張とされるが、それはまさに失われたアイデンティティ回復の追求を示すものである。また、クリオール化されたアフロ・ジャマイカを良しとしない。彼らの説く「アフリカ」は、「シオン」としての「エチオピア」、つまり黒人独自の、「アフリカの」なキリスト教王国である。西アフリカからの伝統、文化の継承は、意味レベルではほとんど萎縮、希薄化されている。その空白を埋めるのに、既存の文化の再解釈を行い、その独自性を「原初」のものとして規範付けるのに、キリスト教の権威を借りるのである。しかし歴史的事実や正確な知識を欠いた彼らの説明原理に散見される矛盾は、今後の彼らの行く末に、ある種の方向づけや影響を与えるであろう。

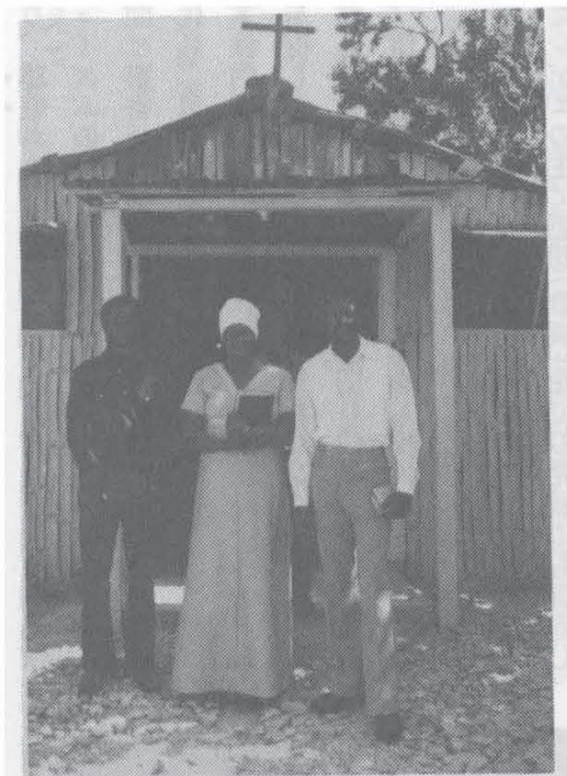
まさにシンクレティズムの一形態としてのラスタファリ讃美歌は、ジャマイカ社会、文化に対して少なくとも二つの再活性化を行なってきたと言える。一つは、厳然とありながら無視、蔑視され続け、そのために瀕死の状態にあった西アフリカ文化、伝

統の見直しであり、尊厳ある黒人としてのアイデンティティ追求といったガーヴェイズムの働きの推進である。もう一つは、特に黒人下層階級の間に鬱寄せが来る諸々の社会問題にも十分応えられず体制と一体化し、自己義認と偽善で形骸化してきたとされ、また西欧キリスト教的価値指向を是としてきた正統派キリスト教諸教会にも反省を促してきたことである。またシンクレティズムに内在する曖昧性と矛盾は、実はそれらを切り抜けるため、信仰と英知を醸成し、情熱と創造により補う場をも提供してきたものとも言えよう。

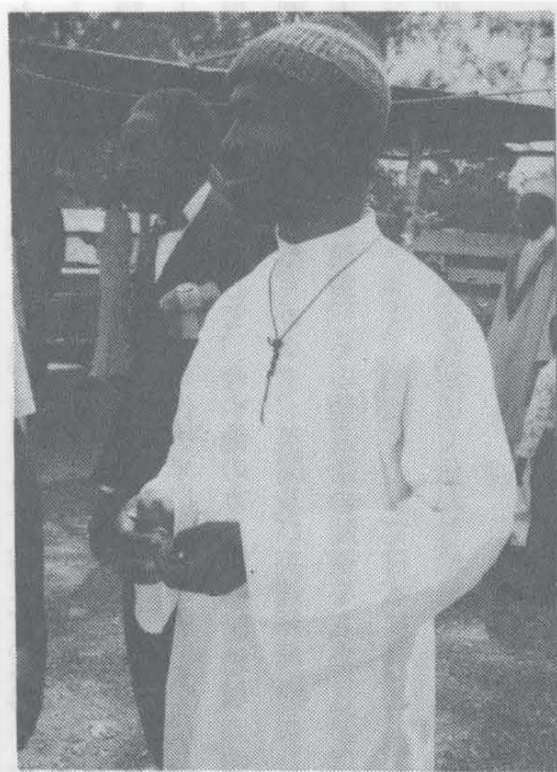
最後にラスタファリ讃美歌は、もう一つのラスタファリ音楽として有名になったレゲエの主に思想(歌詞)面での発展にも貢献したことを指摘しておきたい。ジョーン・バエズやボブ・ディランとすら比肩される、ボブ・マーレイらラスタファリアンの活躍の独自性は、まさに信仰を土台とした社会抵抗を歌い上げてきたことにある。現代(特に七〇年代後半以降)の嵐、あるいは第三世界を象徴する音楽として、今や他のカリブ海諸地域(特に英語圏)アメリカ合衆国、カナダ、英国及び英連邦諸国(アフリカ、大洋州を含む)は無論、その他言語の障壁をも乗り越えて(ブラジル、ソ連、ノルウェー、西独、そして日本にまで)紹介され、彼らの「平和と愛の福音」が広く伝わり始めているのである。



〔写真1〕 ラスタファリアンのバンド「ラス・マイケルとニーガス(皇帝)の息子たち」のコンサート。ある日曜日の午後、キングストン市内の有名なデヴォン・ハウス内庭で、ラスタファリ文化展が開かれた。その時のプログラムの1つ。

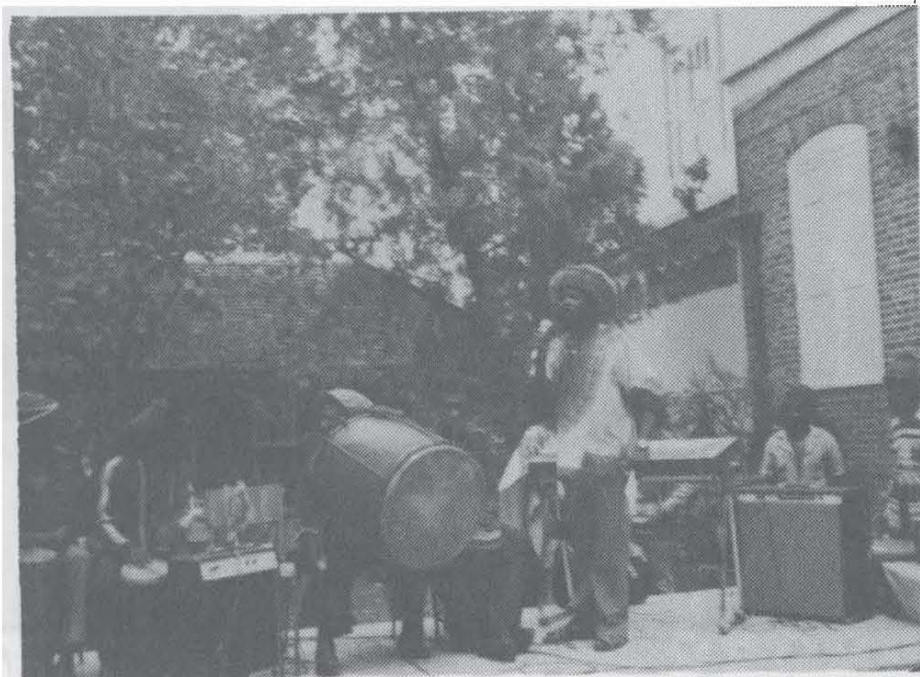


〔写真3〕E. I. C. (ボボ) の「クライスト・マス」礼拝。1月7日「司祭」がシャッカを振て讃美。



〔写真2〕E. O. C. (エチオピア正統教会) 本部 (在キングストン) での (日曜) 礼拝の後の歓談。

中央：セドリック・ブルックス
右奥：聖歌隊員



〔写真4〕E. O. C. の (もう1つのジャマイカ) 支部 (在キングストン) に集まった教会員

付記

本論で扱いきれず、また言及はするが十分に整理、展開できなかった諸々の問題点については、いずれ機会があれば別稿で論じたい。なお先号〔楽譜7〕は歌詞〔例4〕に相当する。

註

- (1) 旧約聖書のレビ記二一章五節を体現化したとされる長髪で、このロックスを信仰の表現としている信者をも指す。実際の彼らの解釈は、「自然」を侵してはならない、つまり神の被造物に何らの傷をつけてはならない、ということ、毛に刃物を当てない。同様に、髪も伸ばす「ビード・マン」(女性にも稀に見られる)も、この「ドレッド・ロックス」派に顕著である。サムソンはよく引き合いに出される。縮れ毛を絡み合わせ、幾つもの束を作って伸ばしている者、ただ髪の脂分を利用してかたまりにして伸ばす者等々いるが、家畜の糞を使って固めるといふ説の信憑性は薄い。ジャマイカの大多数の黒人系住民は髪を伸ばさないので、この長髪は極めて奇異に映り、その様相が恐怖感を与えたことからこの名称がつけられた。一般的傾向のアンチテーゼとなっている。ただし、すべてのラスタファリアンが「ドレッド・ロックス」なのではなく、そのような者たちは「禿げ頭」と「ドレッド」からは蔑称されている。また前述の「ボボ」(E.I.C.)たちは、主にラスタ・カラーで彩られた布を「かぶり物」として頭に巻き、ロックスを隠す。他の「ドレッド」たちの多くも(特に長髪の場合は)、毛糸のタ

ムや深いキャップ等をかぶる。これは多分にその「汚ならしさ」のために、警官や一般社会から偏見や不当な扱い、迫害を被ったことが直接の原因と考えられる。

- (2) この傾向は他のグループ(例えば十二部族)でも見られる。先号の〔図1-3〕も参照されたい。

- (3) 創世記以来の主要なテーマの一つであり、神からの離反↓「楽園」からの追放↓捜し求めて放浪、あるいは神の命令に従ってどこにでも出てゆく寄留者のあり方に通じる。

- (4) “it”は“Babylon”を指すが、その為してきたことは邪悪なことばかりだ、というのがラスタファリアンの主張である。

- (5) 接尾辞のような“-i”は、それ無しでも意味はほとんど変わらない。“-i”を強調し、ふんだんに馳使する「アイタル」(Ital: 原語は“ital”とも言われる)言語の一事例であるが、これによってセラシエの徴であることを示す場合もある。(その瞬間の言語表現にどれほどのイメージや象徴の連鎖が続いていたかは、後にインフォーマントに質問したところで、その内容に完全な一致が見られるわけではない。事後の説明では、その時以上に想像力を働かせ得るし、特に質問者に答える、という特殊な状況においては、作爲的に豊富で複雑な説明を与えることが起こるからである。)

- (6) 発音されるのは形容詞形だが、その後の“-i”も同様、状態、意志、願望が混入している。

- (7) 創世記十四章十八節。

(8) ヘブル人への手紙五章六―十節。

(9) 黙示録二一章六節。またラスタファリアンの中には、「アルファ王、オメガ女王」という表現も用いる者もいる。(先号〔例5〕参照)

(10) 本名はウィリアム・オズワルド。「伯爵」にふさわしい人格と「威信」をもっていたところから、ナイヤビンギ・リズム形成期頃よりあだ名で親しまれていた。

(11) サキソフォーンが中心で、クラリネットやフルートも吹く。ドラムも叩く。現在は、「ユナイテッド・アフリカ」を結成・育成し、音楽と踊りを中心にアフロ・ジャマイカ文化を成熟させ、かつ後輩、若年層の芸術・教育に貢献している。自宅の「ヤード」内に練習室も設け、また定期的に無料オープン・セッションを開き、地域コミュニティにも貢献している。時にその場を借りて「イタル料理」(宗教思想的理由により塩や動物肉〔特に豚〕を一切使用しない)や飲物の自然食を売り、ラスタファリ思想と自然志向を結びつけて宣伝する。彼はまた、ジャマイカ芸術校の音楽研究科の教師でもある。

(12) 脚光を浴びる契機となったのは、ヴィア・ジョンの“Opportunity Knocks”という一種のど自慢大会である。これは、プロの道への機会を掴みたい者たちの披露の場であり、当時唯一の場を提供していたと言われる。

(13) EOCへの招待というラスタファリ・グループ間の公的相互協調関係も、異例ながら存在した。音楽のグループ間

交換は一般に見られない。大きな会場を借りてのコンサートは、MRRの他十二部族も行なう。

(14) LP版としては三枚組の『グラウネーション』(n.d.)と『モザンビークの話』(1975)がある。

(15) ラスタファリアンの歌で、「四百年の奴隷制」、「四百年」といった奴隷制や植民地主義／支配のテーマを明確に揚げたものもある。

(16) 本稿では象徴を、意味内容を表わす媒体となる事物(楽器)、言語(歌詞)、記号(リズム、旋律)、事象(グラウネーション)とする。

(17) V・ターナーは三つの意味レベル「原義的」、「操作的」、「位置的」に分けている。Turner, Victor. *Symbols of Forest*, 1967. Cornell Univ. Press. 厳密にターナーに従うと、例えば原義的意味レベルでは、専門家と非専門家の二分や説明・解釈の共通性の有無(個人個々の見解が共有されているか)も問題とされる。操作的意味レベルでは、グループ構成や構造、象徴操作行為における情緒的側面、個人やグループの貢献(参加)度の考察は必要である。また位置的意味レベルで要求されるのは、象徴操作が問題とされるトータル・システムの中の各局面の目的との関連、その局面における象徴の相関的位置、多義的象徴がその配置で最重要になる意味である。ただしこの小論では敢えて厳密に従った展開は避けた。

(18) 当然のことながら、長老格でも音楽的資質が豊かでないために知識が乏しい者、あるいは音楽にそれ程の意義や重

要性を付与しない者もいる。彼らの説明は相対的に単純であり、象徴的意味体系も浅い。他方、一般の「兄弟」の中にも、知識量も豊富で多義の意味づけをする者がいる。

- (19) 彼の息子の一人「タイム」は、M R Rの優れたリピーター奏者として有名である。しかしその技量は父親譲りとはいえ、まだ若年で精神的、信仰的に成熟しているとは言えず、「専門家」とは見做されていない。

- (20) ただし、主要なグループにも例外は見られる。例えばM R Rでは、現在のリーダー格（コーディネイター、自称「哲学者」）のサム・クレイトン（「ブラザー・サム」）はドラムではなく、タンバリン（通常のナイヤビンギ音楽での使用は異例であるが）等を受け持つ。相対的にメンバーの多くは音楽的質が高い。

E O Cでは、楽器奏者と聖歌隊（後者には若干名の女性も含む）は共にC・ブルックスの指導を受けることもあって、〔図表2〕は適用し得ない。またE I Cのドラム奏者には未熟さが目立つ。安息日礼拝では、シャッカ奏者が一般信徒（「執事」と呼ばれる）の中に混じったこともあったが、例えば「クライストマス」（「エチオピア式」クリスマス）礼拝では、司祭のみシャッカ奏者となった。（写真1）しかし全体としてみると、〔図表2〕の分類は有効である。

- (21) Reckord, V. (1977).

- (22) また入手可能であれば、ペリカンの袋状部が雌山羊よりも良質でリピーターに使う、と説明されている。（Ibid.）

- (23) E I Cは聖俗の区分を特に明確にしているが、ドラム演

奏もその一部として考えられる。彼らはドラム三種類各一台と七本のシャッカを（数字のシンボリズムも重要である）、儀礼でのみ使用する。その他の時は別の「幕屋」に保管され、みだりに（単なる娯楽としても）その使用を禁ずる。

- (24) 十人のみが奏者になり、特別の儀礼には特別の長衣をまとう。楽器は定位置に置かれる。また神権政治グループの前述の大ナイヤビンギでは、昼間は「幕屋」中央の「聖所」にドラムを安置していた。「穢れ」を理由に（ドラムと「聖所」は聖なるもの）、筆者の接触も接近も禁じられた。

- (25) ただし禁止されているわけでもなく、社会的制裁が加えられた話も聞かない。それは秘伝でもなく、またノン・ラスタファリアンでも女性の音楽専門家（V・レコード、O・ルウィン、M・ワイリー、E・ウイント等）にも伝えられている。ワイリーとウイントはドラム奏者としても名高い。（後者は最近遠ざかっているようである。）

ドラム以外、例えばグレイターやシャッカの演奏に、メンバー以外の気心の知れた者の部分参加を、例外的に黙認したことはあった。例えばM R Rを共に訪れたジャマイカ黒人女性は、演奏の途中からクラベスを手にいつしか加わったが、明らかに不満は示されなかった。これには、彼女が政府文化部門の仕事を通じてメンバーに知己がいること、また我々が彼らと親交があったことも原因していたであろう。さらに彼女の音楽的才能（彼女自身音楽家でもあり、演奏はあくまで引立て役だった）とその信頼性の確立も大きい。もう一人の部外者（ジャマイカ黒人男性）の飛入り

参加も黙認された。これらはナイヤビンギ音楽、グラウネイションの開放性を示す好例ではある。しかし原則的には、周縁的で代替可能な音とリズムの領域に限定されるようである。(ドラムならフンデのみ。)ごく小規模でかつ宗教性が薄いグラウネイションで、ドラムを自由に叩いてよい状況もあったが、女性には傍観か、踊り歌うのみであった。近隣に住む若いノン・ラスタの黒人女性は面白半分に手を出したが、恥ずかしがり、すぐ止めた。

(26) 例えばシェヴァンズの報告は、男女比一対三を示す。

Chevannes, Barry "Revivalism: A Disappearing Religion," *Caribbean Quarterly*, Vol. 24, Nos. 3&4, Sept.-Dec. 1978, Univ of the West Indies.

(27) 人間の身体を「聖なる宮」と考えるキリスト教的思想背景が考えられる。「自然」の破壊は忌避されるが、それは「自然」に聖性が付与されているからである。

(28) 例えばEICでは「ダビデの堅琴はドラム」、「弦楽器、特にギターは西洋のもの」であると極端な解釈をし、「ヨーロッパ」の音楽は「サタン」、「悪」のカテゴリーに分類する者が少なからずいた。彼らはレゲエ関係者を「反ラスタ」と見做す。一方EOCやMRRは積極的に音楽を成長させようとし、ギターは使わないまでも管楽器(ごく稀にMRRではレコーディングに鍵盤楽器も使用)を使うこともある。十二部族の有料コンサートはレゲエ化している。大多数のラスタファリアンは、社会経済的に剝奪された貧しい下層階級の出身者であるが、EOCはその会員でもあるボ

ブ・マーレイ夫妻(妻リタも著名なレゲエ歌手)の献金もあり、MRRはコンサートやレコードからの別収入と若干の政府よりの支援があるなどで、グループとしては相対的に恵まれている。また十二部族には中流階級出身者も多い。(29) 西アフリカ起源の民間伝承の主役、トリックスター。強大な力(動物)に対して狡猾さで出し抜き、しばしば成功を収める。また貧欲や羨望、ジャマイカ人、西インド黒人のパーソナリティをも象徴するとされる。

(30) 『ジャマイカ英語辞典』によると、「直接あるいは間接的に生者を助け、またより多くは害を与えに(生者の所に)戻って来られるや信ぜられし者。」詳細は

Cassidy, F.G. & Le Page, R.B. (eds.). *Dictionary of Jamaica English* sh. 1980. (2nd ed. c. 1967).
Cambridge Univ. Press.

(31) 死(者)と関係するのは「反ラスタ」、「にせラスタ」、「羊の格好をした狼」と烙印を押される。ところが五〇年の歴史の中で、著名なラスタファリアンの中にも病死(B・マレーイ)や事故死(C・オシー)で他界した者もいる。運動当初よりのリーダーたちも高齢である。生者のみに関心を向けている場合には通用する不死論も、ひとたび死の現実に直面すると矛盾を大きく露呈する。最も巧妙にしかも大胆に死―不死論の危機を乗り越えた契機は神・セラシエ帝の死である。「神」の死をめぐる議論は、死そのものの解釈も含めて、多様な意見を生んだ。大別すると(1)死の否定(神の不死) ↓セラシエ帝の現存在の肯定、(2)死の否認(永

遠の生命でのみの存在) (3) 死の肯定 (靈魂不滅) ↓セラシエ帝の神性否定) となろう。

(32) 先号四三〇四六ページも参照されたい。

(33) コリント人への第一の手紙十一章二〇十六節。

(34) 例えば女性が口答えしたという理由だけで、猛烈に罵声を浴びせられることもあった。

(35) 男性が先に創られ、女性は男性から取って創られたという創世記の記事に基づいた説明がなされる。

(36) EICは儀礼では使用しない。またEOCは公式上「キリスト教」の体裁を整え、その儀礼様式はカトリックに近い。ガンジャは当然用いないが、匂いのシンボリズムはある。エチオピア人司祭が会衆の列一列を香炉を握りながら回り、煙とその匂いを参列者に与える。

訂正

前号(第4号)48頁楽譜6は次の通り訂正します。

歴史人類学会委員会



ナイヤビンギ音楽に関する参考文献

- Baxter, Ivy. 1970. The Arts of an Island. Metuchen, N. J. the Scarecrow Press.
- Lewin, Olive. 1970. "Folk Music of Jamaica—An Outline for Classification," Jamaica Journal, 4: 2, (June). Kingston, Institute of Jamaica.
- Reckord, Verena. 1977. "Rastafarian Music—An Introductory Study," Jamaica Journal, 11: 1-2, (August).
- White, Garth. 1977. "Master Drummer," op. cit.
なおラスタファリ運動についての文献はここで網羅しきれないので、拙稿修士論文で補足していただきたい。
- Barrett, L. E. 1968. The Rastafarians: A study of Messianic Cultism in Jamaica. Rio Piedras. Institute of Caribbean Studies, Univ. of Puerto Rico.
1977. The Rastafarians—The Dreadlocks of Jamaica. Kingston. Sangsters (in association with Heinemann).
- Owens, Joseph. 1976. Dread—The Rastafarians of Jamaica. Kingston. Sangsters.
- Simpson, G. E. 1955. "The Political Cultism in West Kingston, Jamaica," Social and Economic Studies, Institute of Social and Economic Research, Univ of the West Indies, Mona.
- Smith, M. G., Roy Augier, and Rex Nettleford. 1960. Report on the Rastafari Movement in Kingston, Jamaica. Kingston. Institute of Social and Economic Research, U. W. I.

"Rastafarian Hymn"

—Nyabyngi Music of the Rastafarian Movement in Jamaica—(3)

Yoshiko NAGASHIMA

Through Nyabyngi music, Rastafarians confess their faith, express and idealize their hopes (desires) and expectations. Contexts of lyrics are internalized by singing, and the strong identity as a Rastafarian is formed. By chorus, mutual recognition, companionship/brotherhood is heightened and intensified.

Aggressive feelings and ill will, both individually and socially caused, may be expressed; however, Rastafarian music has functioned to pacify and sublimate them into creative and "tolerant" activities and behaviors. As the wider society gradually and even unwillingly has recognized and added favorable estimation of some of Rastafarians' mottos and life styles, the so far attached stigma of the Black Diaspora has become mitigated. In this point, Rastafarians' contribution to the popular music world (from ska to reggae and further experiments) is immeasurable. And through such popular music, Rastafarian influence has been increased and expanded greatly, particularly to the other Caribbean areas, England, U.S.A. and Canada.

Rastafarian music has challenged the so-called creolized value of Jamaican culture and Black culture in general, which have tended to imitate white European culture. Rastafarians have provided a renewed "African" identity and human dignity, reviving "Ethiopianism" inherent within Jamaican society and presenting new interpretations of Black "survivals".

Rastafarian interpretations of Christianity through Nyabyngi hymns suggest a form of nativization of established Christianity which has not functioned well enough to implant gospel seeds to the lower class people. Rejecting mere syncretism of African religious forms and Western Christianity, Rastafarians have borrowed with careful selection Biblical texts to justify their revelation through tribulations as God's children.